

移動することも可能である。そのため短期間に干拓地内に広く分布するようになったものと考えられる。この干拓地に隣接して野鳥公園があり、水鳥が豊富に生息する地域であるので、これらの分布拡大に鳥類の果たした役割は大きいと想像される。

第2のパターンは、いくつかの水路系で出現頻度は高いが、他の水路系では稀な種で、ホソバミズヒキモ(図3)、リュウノヒゲモ、クロモが該当する。このパターンはすべて沈水植物でみられるが、これらは干拓地の外から総排水路を通して移入したのと考えられる。平常時、水流は幹線排水路から総排水路へ流れているが、増水時、逆流してこれらの水草が幹線排水路へ入り込み、次第に生育域を広げたものと考えられる。しかし、干拓後の歴史が浅いため、水草が侵入する機会のない水路や、種による繁殖様式の違いからこのようなパターンがみられるものと考えられる。この分布パターンで、最も多くの水路系でみられるのはホソバミズヒキモである。これは本種が夏から秋にかけ殖芽を多量につくる特性をもつことが、分布域拡大に大きな役割を果たしているからである。

第3のパターンは、ミジンコウキクサ、イボウキクサ(図2)のように限られた水路の中で、しかも一部の場所のみに分布するものである。この2種は、濃尾平野全域をみても、限られた水域に分布するのみで水鳥などを介して本干拓地へ侵入する機会は少ない。現在、本地内のわずかな地点にのみみられるのは、最近になって侵入し、その後日が浅いため、今後、分布域を急速に広め、第1の分布パターンを示すようになると考えられる。

本干拓地で以上のようにいくつかの分布パターンがみられるのは、水草の侵入方法、繁殖様式、侵入してから時間経過が種によって違っているからである。水路の環境が水草の分布を規制する要因になるが、幹線および総排水路では周年干上がることはなく、水質や底質(糟谷、1989)からも現存の種の分布を規制する程大きな差は水路間でみられない。しかし、支線排水路の秋～冬にかけての干上がりは、沈水植物の分布に影響を与えているものと考えられる。

最後に本研究の機会を与え、いろいろご協力いただいた愛知県農総試の糟谷真宏、豊田一郎の両氏に感謝する。

参考文献

- 糟谷真宏・他、1989. 底生動物相による鍋田干拓地内農業排水路の水質評価. 愛知県農総試研究報告 21: 115-122.
- 浜島繁隆、1971. 木曾川デルタ地帯の水生植物の分布と生態. 愛知県私学協会研究集録7: 1-7.
- 浜島繁隆、1976. 濃尾平野における農業用水路、溜め池の大型水生植物とその動態. シンポジウム: 肥料による陸水の汚濁と指標植物, 99-102.
- 浜島繁隆、1983. 濃尾平野における農業用水路の水生雑草の分布と2, 3の環境要因. 雑草研究: 28(4): 38-42.
- 藤井 堅、1981. 海部郡鍋田干拓地区の概要と営農計画. 「愛知県開拓史」(愛知県) pp.631-641. 愛知県.

○『国指定天然記念物「駒止湿原」保存対策調査報告書』(福島県田島町教育委員会、1989年3月、159頁)

駒止湿原は福島県の西南部、標高1000m余りの所に位置する湿原群で、高層湿原から周辺の森林にいたる推移帯の自然もよく残されており、1970年に国の天然記念物に指定された。しかし、訪問者の増加などさまざまな人為的影響のために植生変化などの危惧が生じ始めているという。このような事態に直面して湿原の現状が詳しく調査された。時間と予算の制約のため不十分な点はあったというが、この種の調査としては極めて本格的なものである。泥炭層の状態や地下水位などまず湿原の地下構

造の調査にはじまり、植物群落、花粉分析による植生変遷、コケ類もふくめた植物相、そして周辺の環境(土地利用など)の変化ならびにそれに伴う湿原の環境変化に及ぶ。植物群落の調査は、とおりいっぺんの群落列挙ではなく環境傾度に対応した各植物の分布特性がしっかりと押さえられていて、他の湿原の調査にもたいへん参考になるものであろう。最後に湿原の保全に関する提言がまとめられている。

この調査は東北大学系の若い研究者が主力になって行なったものというが、学問的良心と情熱が感じられる報告書である。(角野康郎)